談話室

園田裕史・大村市長インタビュー

―新幹線の新駅も開業、人口が着実に増加する住みやすいまち―

長崎県のほぼ中央に位置する大村市。昨年9月には西九州新幹線が開業、高速交通の要衝としての存在感を増している。豊かな自然に恵まれ、技術力を誇る企業の立地も進み、住みやすいまちとして人口が着実に増加している。大村市の魅力や今後の展望を、園田市長にお聞きした。

大村市長　**園田（そのだ）　裕史（ひろし）**

聞き手：一般財団法人　日本立地センター　専務理事　上野（うえの）　透（とおる）

※インタビューは１月中旬に対面形式で実施した。

高速交通“三種の神器”を手に

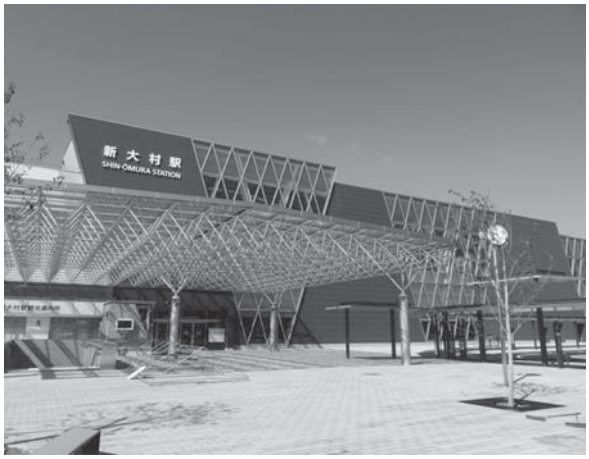
上野：私は2007年から2009年に長崎大学経済学部で教鞭をとっていましたが、それ以来の長崎県への訪問で、このインタビューを大変楽しみにしておりました。大村市には長崎空港があり、私も今回を含め何十回と利用しましたが、昨年はさらに西九州新幹線が開業し、新大村駅が開設されました。先ほど私も素敵なデザインの駅舎を拝見しましたが、新幹線を活用した今後の市の発展への期待が高まっていますね。

園田：おかげさまで昨年の９月23日に西九州新幹線「かもめ」が開業しました。大村市には空港があり首都圏や大阪には飛行機で行けて、高速道路のインターチェンジも二つあり、利便性が高いということで人口も増えてきました。これまでは特急列車が止まらなかったのですが、新幹線開業で、鉄道の高速交通も手に入れることができました。今までは、博多に行くのに隣の諫早に逆戻りして特急に乗っていましたが、新大村駅から直接新幹線を利用できるということで、非常に利便性が高まったと思います。

空港と新幹線と高速のインターチェンジ、いわゆる高速交通三種の神器を兼ね備えたまちは、全国で1,741カ所ある基礎自治体のうち14カ所しかありません。九州では北九州市、福岡市、大村市で、他はほとんど政令市です。政令市でもない、人口10万人ぐらいの地方の自治体に高速交通三種の神器が兼ね備わったということで、利便性が高まり、市民の暮らしやすさや、産業振興、企業誘致など、さまざまな点で今後に期待されますので、これを活かしたまちづくりを進めていかなければならないと思っています。

上野：市の組織として「新幹線まちづくり課」があるとのことですが、新幹線を活用したまちづくりを具体的にどのようなかたちで進めていかれるのでしょうか。

園田：新幹線まちづくり課というのはどちらかと



西九州新幹線「新大村駅」。ガラスを使用したデザインが印象的な外観。

いうと開業までを担ってきたセクションで、新幹線の高架橋の建設、駅舎の建設、駅前の開発などを主に進めてきました。

市では３年ほど前から「新幹線アクションプラン」というプランを立て、行政だけでなく企業や団体、市民も巻き込んだかたちで、一体となって盛り上げて開業の準備を進めてきました。そのアクションプランの３本柱の一つは「プロモーション」です。大村市に行きたい、大村市で何かをしたいと思ってもらうためには、まず大村市を知ってもらわなければならないので、新幹線の開業や、長崎空港の存在などについて知らせるプロモーションです。

二つ目の柱が「観光商品づくり」です。大村市の観光をテーマに、どのようなかたちで市内を巡ったり、食べたり、遊んだりといった体験ができるかをPRするものです。

三つ目が、大村市に住みたいと思ってもらえるような「移住・定住促進」です。

最終的には大村市の人口増につながるようなかたちで、プロモーション、観光商品づくり、移住・定住促進という三つを進めてきました。

これらは新幹線まちづくり課だけでなく、産業振興部の観光振興課や商工振興課、地方創生推進室や広報戦略課などと連携し、市役所が一体となって新幹線開業の効果をしっかり得られるよう事業を進めてきました。

工事関係は完了していますので、新幹線まちづくり課は規模を縮小して、開業後のさまざまな後処理など新幹線に関する事業を進めます。ただ、申し上げた三つの柱はそのまま、それぞれの関連部署が担っていくかたちで、新幹線を活かした事業を進めることとしています。

上野：既存のJR在来線の大村駅と、新幹線の新大村駅、二つの大きな駅があるまちとなりましたが、どのように連係させてまちづくりをしていこうとお考えでしょうか。

園田：JR在来線の大村駅周辺は、中心市街地といわれているエリアですが、新幹線の新大村駅にも在来線の駅ができ、市の中央部と南部、二つの拠点ができました。大村市は非常にコンパクトなまちなので、今は空港と新幹線駅の間はデマンドタクシーを走らせています。さらに、公共交通をより連係させていくことで、複数の拠点をネットワークで結ぶという、公共交通体系づくりを進めています。市内の大きな四つの拠点である、市役所、大村駅、新大村駅、医療機関エリアをつなぎ合わせるような公共交通体系の見直しをし、公共バスやそれに結び付ける乗り合いタクシーを走らせたりすることで、拠点間をしっかり結んでいきたいと思っています。

なぜ長崎県で唯一人口増加する市か？

上野：大村市は長崎県の中で唯一人口が増加している市と伺っています。その背景としてどのような取り組みや要因があるのでしょうか。

園田：長崎県の中央部に位置し、北の佐世保市や南の長崎市に行くのにも利便性がよく、通勤・通学の拠点となりやすいことがあります。転勤がある学校の先生や公務員でも、大村市に家を構えるとどちらに転勤になっても大丈夫です。また、先ほど申し上げたように高速交通が充実しており、コンパクトなまちで、利便性が高いです。地価が安くて家を建てやすく、若いファミリー層が家族で住むのにも向いています。そして教育と福祉が充実しています。長年、いろいろな事業を通してそうした情報の発信を継続していますが、その中で、よいイメージが広がったということだと思います。

教育や福祉の分野では、他の自治体に先んじてさまざまな施策を講じてきました。今は地方創生ということで、どの自治体も子育て支援策を推進

市長室で実施したインタビューの様子。

していますが、大村市では早くから力を入れて取り組んでいます。50年間以上人口が増加し続けており、昨年末時点で９万8,305人です。10万人までカウントダウンの状態で、確実に到達すると思います。

なぜ昔から福祉や教育に財源を充て充実させることができたかというと、市内のボートレース場「ボートレース大村」の存在が大きいのです。30年ほど前はかなり売上を伸ばしていて、その財源を活用して福祉・教育の充実、下水道、市道、公共施設などのインフラ整備を進めることができました。

ボートレース大村も一時は売上が低迷し赤字になって大変だったのですが、今はＶ字回復をして売上日本一となっています。いろいろなインフラもそろって人口も増え続けていますが、今後またボートの財源を活用して、未来に向けたまちづくりをしっかり進めたいと思っています。

上野：子育て支援については東京都の小池知事が先日、月に5,000円の給付を打ち出し話題となりました。国も異次元の少子化対策を実施していくとしています。大村市は既に先進的に取り組まれているということでしょうか。

園田：今回、小池都知事が０～２歳の第２子保育料を無料としていますが、大村市はもともと第２子目の保育料は無料にしていました。このように、20年、30年前から、子育てをしやすくするソフト事業に財源を充ててきました。

そして両親の目線で子育てのしやすさということを考えると、保育園・幼稚園、職場、学校が近くにある、買い物もすぐ近くでできるといったことも重要になります。大村市はこうした点でも恵まれた環境にあります。

また、大村市には、クリニックといわれる診療所・病院が90ほどあります。クリニックでは対応できないときは市立病院が中核病院としてあり、さらに大変なときは九州有数の高度救命救急医療センターがあります。一次医療、二次医療、三次医療が全部このエリアの中にコンパクトにありますから、安心して子どもを育てられます。

上野：全国の出生率が1.33であるのに対し、長崎県が1.61、大村市は1.75という数字にも表れていますね。

園田：2017年頃に1.9までいって、2.0までもう少しでしたが、翌年1.7台に下がりました。もちろん決して低い数字ではありませんので、何とか私たちが目標にしている2.0に向けて、子どもを産んで育てる一気通貫の施策を今後も充実させていきたいと思います。

移住、Ｕターン促進への工夫

上野：地域活性化のため国も移住支援を進めていますが、大村市ではどのような取り組みをされていますか。

園田：東京近辺から地方に移住する人が支援給付を得られるという制度は活用させていただいていますが、大村市ではさらに「暮らしコンシェルジュ」という窓口を設けて、問い合わせ時から移住まで手厚くサポートしています。

特徴的なのは、移住してきた方々だけを集めた交流会です。全国の自治体が移住促進のためいろいろな支援策を展開していますが、移住したらそこで関係性が終わっているところが多いと思います。大村市では、移住してきた方々だけのコミュニティーをつくって、定期的に移住者交流会を開催しています。そこで移住者同士が友達になり、不安なことを話したり、趣味・サークルの輪が広がったり、さらにはビジネスにつながったりなど、さまざまな交流が生まれてくることを狙っています。移住後もフォローアップすることで、次の移住者を招くことにもつながっていると思います。

大都市圏で開催する、移住相談会の様子。

もちろんそれは移住後の話で、移住するきっかけは、やはりベースにある立地のよさと利便性の高さ、それに子育て支援策等が充実して子どもを産み育てやすいという環境があることだと思います。

しかし大学はなく、高校卒業後、18歳から25歳ぐらいまでの若い世代は進学や就職で市外へ出ることが多いのが課題です。Uターンで帰ってきたり、県内に就職して大村に住み続けてもらったりできるような取り組みを進める必要があります。

コロナ禍の中で特筆すべきこととしては、「大村～つながるプロジェクト」と題した取り組みがあります。大村から県外に出た学生が、コロナ禍の状況でアルバイトもできず、学校にも行けず、友達とも交流できず、寂しい思いをしているのではないか、故郷の大村市は皆さんを応援していますよということで、4,000円相当の大村の米、牛肉、豚肉、野菜、ハンバーグ、アイスクリームなど、大村を思い出してもらえるようなものを申し込んでもらって送りました。

物を送るのは地元の産業振興にもなっていいのですが、それだけではなくて、送ったときに「大村市の公式LINEに登録してくださいね。そこでつながりましょう。寂しかったらいつでも帰ってきてくださいね」というコミュニティーをつくりました。それで「地元がこんなに応援してくれたんだ」と大村市を思ってくれて、将来的には故郷に帰ろうと考えてくれたらいいと思っていました。そうしたところ、今度「大村市のために市役所で仕事がしたい」と帰ってくる人がいて、取り組みが成果につながってきていると感じています。

上野：それは効果的な取り組みですね。市のホームページにある「大村市なんて大嫌い」という、Uターンを促すPR動画[1)]も面白かったです。一度は大村市から外に出たけれども、やはり戻ってきたいという若い女性の感覚を表現していて、大変印象に残りました。

アクセスのよい内陸性団地、優秀な人材確保

上野：今朝、多くの企業が集まっている「大村ハイテクパーク」や「オフィスパーク大村」を車窓から見学しました。分譲中の「第２大村ハイテクパーク」も見学しましたが、大村湾を一望できる丘にあり、すがすがしい気分になりました。その分譲も順調に進んでいると伺っていますが、企業にとっての大村市の魅力、企業誘致で特に力を入れているところは何でしょうか。

園田：まず一番は、やはり立地のよさです。空港からは第２大村ハイテクパークまで約10km、高速のインターチェンジからは５km、新幹線の駅からは６km です。中山間地にあるのですが、市街地から近いですし、物流等も含めて非常にいいところに企業が拠点を構えられます。海外に展開している企業にとっては、空港、新幹線や高速道路を通じて取引先や海外工場とつながることができます。

それから大村は、地震発生確率が低く、また、内陸性の工業団地で、塩害の被害もありません。

第２大村ハイテクパークは12.4ha、４区画で整備し分譲を開始しましたが、３区画の分譲が決まり残りは１区画で完売は目前です。

企業の方々が口をそろえて言うのは、この地は優秀な人材の確保ができるということです。私の母校である大村工業高校は、これまでバレーボール日本一、アーチェリー日本一、ソフトボール日本一、第一種電気工事士試験全員合格、ジュニアマイスター取得日本一の実績があり、文武両道の

分譲中の第２大村ハイテクパーク。４区画（約12.4ha）のうち３区画が分譲済。

1）https://www.youtube.com/watch?v=L4BrNVbHjx4

工業高校ナンバーワン宣言をしています。技術力も高く、あいさつや掃除も行き届いています。文武両道と人間力の高さについて、同校を訪問した企業の方々より、常々お褒めの言葉をいただいています。

大村工業高校だけでなく、県内の大学や他の工業高校も非常に優秀です。長崎大学の工学部や、佐世保市の佐世保工業高等専門学校があり、高等技術・高等教育を学んできた技術者を獲得できるところに大村市の工業団地の優位性があると思っています。

上野：私ども一般財団法人日本立地センターにも、企業から多くの立地相談が寄せられるのですが、立地場所で必要な人材が採れるかどうかは重要なポイントの一つです。優秀な人材が確保できる状況は大きな強みだと思います。今は理系人材が多く必要とされていますし、大村工業高校の例のように、日本一になるための練習を通して人間力も養われるのだと思います。

自然や花に囲まれた初のキリシタン大名都市

上野：次に、大村市の自然、歴史、文化についてお伺いします。さきほど、大村湾や海上空港を見渡せる丘にある自然公園の琴平スカイパークなどを見学し、豊かな自然を実感しました。初のキリシタン大名で有名な大村純忠の居館跡や、桜や菖蒲の名所として美しく整備されている大村城跡の大村公園では歴史を感じることができました。これらの豊かな自然や歴史を、今後どのように活用していこうとお考えですか。

園田：新幹線の新大村駅は終着駅ではないですし、観光は武雄、嬉野や長崎と比べると苦戦していますが、大村市の持つ文化、環境、自然などを活かすことが大事だと思っています。

自然という面で言うと、一つは、交通の利便性が高いコンパクトなエリアに、大村湾というシンボリックな海があり、山や川もあって、自然体験ができるアウトドアアクティビティーもあるという環境です。それを活用し、この地でできる「コト体験」を充実させていきたいと思っています。

もう一つは大村公園で、大村公園の桜は「日本さくら名所100選」、大村公園自体は「日本の歴史公園100選」に選ばれていています。桜は天然記念物のオオムラザクラ、ソメイヨシノもとてもきれいで、大村といえば桜、と称されるシンボルになっています。６月頃には西日本最大規模の30万本のハナショウブが咲きます。これらを充実させ、大村市はどこに行っても花であふれているというふうにしたいと思っています。

県内有数の花の名所として知られる大村公園。桜や、花菖蒲などが咲き誇り、多くの花見客でにぎわう。

上野：いいですね。次は、桜や菖蒲の時期にぜひ来たいと思っています。

園田：また歴史でいえば、大村純忠という日本で最初のキリシタン大名が知られています。長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産が世界遺産に認定されていて、コロナ前はたくさんの人が長崎を回っていました。世界遺産の構成資産は天草も含めて12カ所あるのですが、大村は入っていません。しかし、キリシタン潜伏の歴史がどこから始まったかというと、最初のキリシタン大名がいた大村からです。そこから布教が広がり、弾圧があり、逃げて、潜伏していったのです。世界遺産になっている歴史の前提が大村市から始まっているのです。ここを知ってから世界遺産に行く方がより充実した歴史観光になるのですが、そのことをまだまだ私たちが知らせきれていません。大村純忠が派遣した天正遣欧４少年については、皆、学校の社会の授業で習ってよく知っていますし、映画にもなってロマンがあります。

それに加え、昨年話題になりましたが、ユネスコの無形文化遺産に約500年前から伝わる「大村の郡三踊」の沖田踊と黒丸踊を含む「風流踊」が

日本初のキリシタン大名「大村純忠」がローマに派遣した４少年の天正遣欧少年使節顕彰之像。

登録されました。

これらを観光資源として上手に伝え、他とは違う歴史観光として、ここに立ち寄っていただけるようにしていきたいと思います。

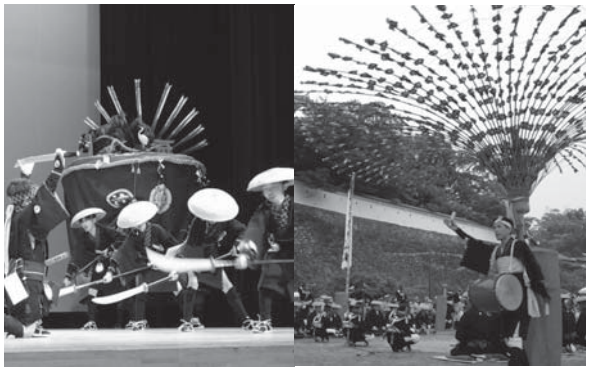
上野：それはいいですね。私は歴史や観光が好きで訪日外国人にガイドをする通訳案内士の資格をもち、隠れキリシタンの世界遺産は必須項目として勉強しましたが、今日は大村純忠居住地跡を見学して、キリシタンの歴史のロマンにひたることができました。大村の風流踊もぜひ見てみたいです。

周辺と一体で行う産業振興、まちづくり

上野：産業振興やまちづくりなどで特にPRしたいことをお伺いできればと思います。

園田：ぜひ大村市に企業進出していただきたいと思います。大村市は、大村市だけでまちづくりを進めようとは思っておらず、交通アクセスのよさを活かして、長崎市などの周辺地域や、東京・大阪などといかに連係できるか、それを考えることが大村市の発展につながると思っています。

産業振興の面では、諫早市にソニーが増設・増床で機能拡大しています。今度新しく京セラ㈱も諫早市に来ます。諫早市に企業が進出すると、そこに勤めている人が大村市に住むことがあるわけです。逆に大村市の工業団地に立地しているSUMCO TECHXIV㈱などに勤めている人が諫早市に住むこともあります。また、このような投資、増産計画に際しては協力企業が必要になります。



ユネスコ無形文化遺産に登録された「沖田踊」（左）と「黒丸踊」（右）。

地場の企業がステップアップできれば一番いいですし、協力企業をさらに誘致していくことになれば、このエリア一帯で半導体関連などの集積が進み、いろいろなことができるようになります。周辺と一緒にまちづくりを考えていって、それが結果的に大村市の発展につながるということを今後も進めていきたいと思います。

新幹線についても、武雄、嬉野、長崎や諫早に来た人に大村にも来てもらうとか、大村にいったん寄ってから行ってもらうとか、いろいろな可能性が考えられます。大村市だけではなく広い視点でエリアを捉えて、その拠点、ハブが大村市になるというような産業振興・観光振興を進めていきたいですね。それにより、ここが一番便利で住みやすいということで、さらに人も集まって、住み続けていただけるようになると思っています。

また、大きな起爆剤の一つとして期待されるのはハウステンボスのIR誘致です。実現すると１万人強の雇用がそこに発生して、大村市にも多く住んでいただけると思います。そこを訪れる訪日外国人や国内の旅行者は、長崎空港や新幹線の新大村駅から入ってこられます。出入り口は大村市なので、このお客様にいかに大村市へ滞在していただけるようにするかが大事です。

IRや長崎県全体の産業振興について、大村市から始まるような施策を展開したいと思っています。そのためにも新幹線を一日も早くフル規格にしたいと思っています。

上野：新幹線が長崎まで来たといっても、まだ博多～武雄温泉の間は在来線特急ですので、早く全線開通するといいですね。

看護師の経験と市政への取り組み

上野：園田市長は看護師をされていた経歴をお持ちです。コロナ禍の中で看護師の大変さを目の当たりにしてきましたが、看護師の経験が市政にどう活かされているのでしょうか。

園田：看護師として、医療や福祉、介護といった現場で仕事をしていました。コロナ禍においてもベースの知識はあるので、最前線の現場のスタッフの皆さんに感謝をしながら、現場を理解しながら進めてきた３年だったと思います。

一方で、今回のコロナ禍への対応はそれだけではどうにもならないことに気付かされました。単に人々の動きを封じ込めたり、世の中の活動を止めればいいのではなく、コロナ対策と両立させて、地域経済を回していかなければいけません。かつて私が看護師として勤めていた頃、その機関のトップから、「医療者だからといって医療だけで、資格だけで飯を食おうと思っていたら、活躍できないし、求められない」「医療者でありながら世の中の動きを注視して、世の中がどのように変わっていて、そこから診療報酬で病院に収入が入って、そこから自分に給料が入っているという意識を持って仕事をしなさい」と言われていたので、看護師でありながら世の中の動きを注視していました。今回のコロナ禍においても、広い視野を持って取り組んでいくことが大事だと改めて思わされました。

市役所の仕事はもちろん医療・福祉だけでなく多岐にわたっていますから、私の詳しくない分野もあるのですが、自分が分からないからこそ、分からない人にお伝えするにはこういう言い方の方が興味を持ってもらえるのでは、といった視点は持っています。分からない方がいい面もあるのかもしれないと思いながら日々仕事に取り組んでいます。

上野：市役所のホームページを拝見すると、市長はスケジュールを毎日公表されていて、写真を載せて報告もなさっています。本当にいろいろな業務でお忙しく過ごされているのだなと思います。

しあわせ実感都市・日本の西の玄関口

上野：最後に、大村市の今後の展望をお話しいただけますか。

園田：繰り返しになりますが、大村市は交通の利便性がよく住みやすくて、子育てをしやすいということで、人口が増え続け発展してきているまちです。自治体経営という意味ではボートレース大村もあり財源が安定しています。まずはこのような大村市の強みをしっかりと活かしていきたいと考えています。

私たちは総合計画の中で、「～行きたい、働きたい、住み続けたい～しあわせ実感都市大村」というキーワードを掲げています。そこに集約されていますが、一人一人が幸せだと感じてもらえるようなまちづくりをすることが、一番大きな使命だと思っています。

また産業振興については、西側の、アジアの方々からすると、日本の出入り口として長崎は非常に近いのです。福岡よりも長崎が近く、その長崎の空港や新幹線の駅が大村市に所在しています。その優位性を活かして、しっかり西側の玄関口、世界の大村市になれるように頑張りたいと思います。

上野：西側のアジア諸国などを経済に取り込んでいける、非常にポテンシャルが高いところだと思います。

本日はどうもありがとうございました。

（文責：編集部）

園田市長（写真右）と上野専務